平成 24 年度地理部会　第 34 回県内巡検記録

群馬県立伊勢崎興陽高等学校　原澤 亮太

１．はじめに

平成 24 年度の県内巡検は、西毛地区の部会員による企画･案内により、富岡甘楽地域を巡検した。

本地域は世界遺産登録を目指す「富岡製糸場と絹産業遺産群」に関連する歴史的な資源が広く点在している。また上毛かるたに「ねぎとこんにゃく下仁田名産」と詠われているように、群馬県を代表する農産物の産地でもある。

本巡検では、歴史・自然・産業において、日本を代表する資源をもつ同地域の現状について、多くのことを学ぶことができた。以下にその内容を記す。

なお当日、講師の生澤先生、森先生が作成した各見学地の説明資料を配布いただいた。本報告における見学地の解説については、この資料の内容を一部引用している。

２．巡検の概要

（１）開催日

平成 24 年８月６日

（２）巡検地域

富岡甘楽地域

（３）講師

生澤　英之（前橋清陵高等学校）

森　貴由紀（前橋清陵高等学校）

（４）参加者：18 名

地理部会顧問の茂木先生、飯塚先生にもご参加いただき、例年以上に賑やかな巡検となった。

（５）行程

①　富岡製糸場

②　下仁田町自然史館（下仁田ジオパーク）

③　こんにゃく博物館(ヨコオデイリーフーズ)

※　日昇軒（昼食：ジオパークグルメ）

地形の陰影図には国土地理院「数値地図 50m メッシュ（標高）」を用いた

対象地域概観図

３．巡検の記録

①　富岡製糸場

富岡製糸場は、日本初の機械製糸を行う官営模範工場として 1872 年（明治 5 年）に操業を開始した。フランス人技師ポール・ブリュナ(Paul Brunat)の指導のもとフランスから繰糸機や蒸気機関等を輸入し、当時の最新技術を備えていた。日本の蚕糸業の発展のみならず、世界の絹産業の発展と絹の大衆化に大きく貢献した。このことが評価され、「富岡製糸場と絹産業遺産群」として文化庁よりユネスコに世界遺産への推薦が決定し、現在、登録を目指した取り組みが進められている。

機械製糸の普及と技術者育成という官営工場としての目的が果たされた 1893 年（明治 26 年）、三井家に払い下げされた。その後は片倉製糸紡績会社（片倉工業）の所有となり、昭和 62 年（1987 年）3 月 5 日まで約 115 年間操業を続けた。

当日は、富岡製糸場総合研究センターの今井幹夫所長より、「富岡製糸場の歴史と文化」について、パンフレット等には載らないような研究成果を含め、たいへん興味深い講義をいただき、その後構内をご案内いただいた。

元寄宿舎食堂にて今井所長より講義いただく

講義では、建設の経緯や工場建築の特徴、女工の生活や労働環境、ポール・ブリューナの功績など幅広く学べた。とくにポール・ブリューナの仕事や生活については興味深く、当時のお雇い外国人の具体的な仕事ぶりや日本人との交流の様子などをつぶさに知ることができた。

講義の後は、トラス構造の小屋根が美しい繰糸場、建設当初からの調度品の残る洋館・検査人館、ブリューナの寄宿舎として建てられ、彼の帰国後は工女のための学校として使われたブリューナ館といった建物を見学した。製糸場のシンボルの 1 つとなっている木骨煉瓦造の繭倉庫は建築から 130 年経過した現在も、ほとんどゆがみ等が起きていないそうで、当時導入された建築技術の高さがうかがえる。フランドル積み（フランス積み）と呼ばれる工法で、建物に流麗さをもたらす積み方ということである。

フランドル積みの煉瓦

東繭倉庫前にて

なお、富岡製糸場は構内に駐車場がないため、近隣の駐車場から市街地を歩いて往復した。製糸場の周辺には多くの商店やカフェ、土産物店などが軒を連ねるが、これらの建物が周辺環境を意識した落ち着いたデザインに変わってきている。世界遺産登録にあたっては、こうしたバッファゾーンとよばれる地域の景観形成も重要とされている。富岡市でも景観条例を制定して景観形成に取り組んできているが、街並みが少しずつ洗練されてきていると感じた。

②　下仁田町自然史館（下仁田ジオパーク）

「ジオパーク（geopark）」とは、地球科学的に重要な地形や地層などを核として、自然に親しみ、

地球の歴史や人間生活との関わりを知るために整備された地域を指す。

ジオパークの活動は、2000 年からヨーロッパではじまった。2004 年には、ユネスコの支援により「世界ジオパークネットワーク」が発足し、ジオパークを審査･認定する仕組みがつくられた。2012 年５月時点で 27 か国 88 地域が世界ジオパークに認定されており、日本では糸魚川など５か所が認定されている。日本では 2008 年に国内の認定機関として「日本ジオパーク委員会」が発足し、2012 年９月時点で世界ジオパークを含め 25 地域が登録されている。

下仁田ジオパークは、中・古生代の付加体、中央構造線の一部と考えられる断層、地殻変動によって移動した地層が見られる跡倉クリッペなど、日本列島の形成にかかわる大きな地殻変動の痕跡を、コンパクトな範囲で数多くみられる地域として、日本ジオパークに登録されている。

今回訪れたのは、下仁田ジオパークの拠点施設、下仁田町自然史館である。ここでは下仁田町教育委員会ジオパーク推進室の関谷友彦氏にご案内いただいた。

同館は廃校になった小学校の施設を利用し、地質資料・考古資料を展示しているほか、研修施設としても使われている。各教室（展示室）には、下仁田地域周辺で採取された岩石類や化石類がところ狭しと展示されていた。下仁田地域で観察できる、時代も成因も異なる様々な地質現象を一堂に体系的に学習できるようになっている。

下仁田町自然史館

館内を見学した後、同館から県道を挟んで東側を流れる青倉川岸に、跡倉クリッペを形成したときのすべり面を観察できる露頭があるとのことで、そちらをご案内いただいた。この付近一帯で見られる海成層の変化した「青岩」の上に、地殻変動により移動してきた跡倉層が乗っている様子がはっきり観察でき、ダイナミックな地殻変動の痕跡に改めて驚かされた。

青倉川岸で地層を観察

昼食では、下仁田町中心部にある日昇軒にて「ポークのあぶり焼丼・ジオ風」をいただいた。地元産のこんにゃくなどを使った数種類の具材が縞状に盛られ、地層をイメージした「ジオパークグルメ」とのことである。この他にも町内の飲食店・小売店では、ジオパークに関連した商品を開発し提供・販売を行っているとのことで、ジオパークを町おこしの起爆剤ととらえ、積極的に利用していることがうかがえた。

③　こんにゃく博物館（ヨコオデイリーフーズ）

株式会社ヨコオデイリーフーズは、甘楽町に本社を構える、日本最大級のこんにゃく製品生産業者である。こんにゃく博物館は同社の本社・工場に併設され、工場見学、こんにゃく製造の歴史学習、各種体験ができる施設である。同館館長の猪谷氏に館内をご案内いただいた。

現在、日本で生産されるこんにゃく芋の９割が群馬県産とのことである。中でも富岡甘楽地域は明治から続く県内でも有数の産地の１つであった。現在、こんにゃく芋の生産量では昭和村をはじめ

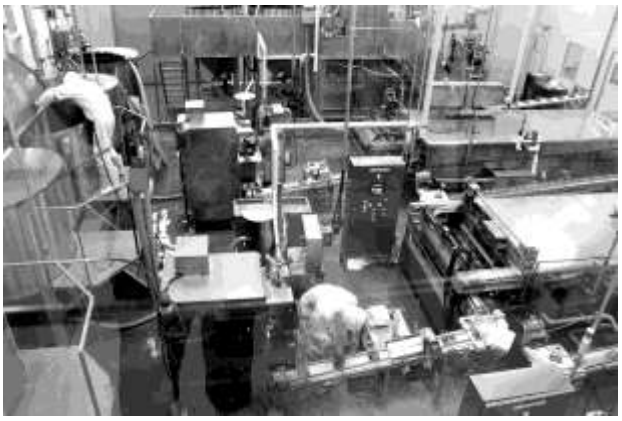
とする北毛地域が最も多いが、製品の国内生産１位の同社が立地するなど、今も一大産地であることに変わりはない。

また、ここで驚いたのは、こんにゃく生産に欠かせない芋の製粉技術の自動化･高速化において、富岡製糸場で培われた近代工業技術が応用されていた点である。この地域特有の歴史的な産業が、意外なところで結びついて、現代の成長に繋がっていることに、感動を覚えた。

パネル展示を見ながら解説を聞く

パネル展示等の解説をいただいた後は、パッキング等の製造ラインを見学した。見学コースが高い位置に設置されており、製造ラインを俯瞰する形で見学しやすかった。

見学の後は、さまざまなこんにゃく製品を試食できる無料バイキングである。田楽や刺身こんにゃくなどお馴染みのものから、ラーメン、レバーなど、それがこんにゃくであることを忘れそうなものまであり、大いに楽しむことができた。



こんにゃくの製造ライン

４．おわりに

今回の巡検では、

・世界遺産登録を目指す富岡製糸場と富岡市街地
・日本ジオパークに登録され、学術的なフィールドとして、また新たな観光資源として活用を模索する下仁田地域
・こんにゃく製品の生産量日本一を誇るヨコオデイリーフーズ

を訪れ、富岡甘楽地域の歴史・自然・産業について多くのことを学ぶことができた。

いずれも全国レベル、あるいは世界レベルでの活動を行っているものであり、県内に住む者としても今後の展開に期待の高まるものばかりである。身近な話題から、日本や世界との関わりを学べる好事例ととらえ、今後の教材研究に役立てていきたい。

謝辞

本巡検にあたっては、講師の先生方にわかりやすい資料をご用意いただき、中身の濃い巡検を行うことができましたこと､深く感謝申し上げます。また、各訪問先では、お忙しいなか、丁寧なご対応をいただいた皆様方に部会員一同、心より感謝申し上げます。